実践報告　情報から解釈へ
――物語世界を立ち上げる――

谷川　司

一　はじめに

テクストに対して主体的に向き合い、そのテクストに新たな意味を見出す。「読むこと」の醍醐味とは畢竟その一点に尽きるものと考えている。願わくは、眼前の生徒たちにそうした活動を経験してもらい、教材に対する自立した学習者、ひいては生涯にわたり成熟した読者としての成長にいささかなりとも資するような授業を供したいと、常に念頭にこそあるものの、日々の授業計画にそのような活動を組み込むスペースは、諸般の事情により、ほぼ望めない。

過日、勤務校への指導主事訪問に関る研究授業の機会が得られたので、日々思っていることを、少し実践した。過日といっても四年も前（二〇一〇年）の実践であるが、実は次年度（二〇一五年度）より、桃山高校国語科として、本校スーパーサイエンスハイスクール（以下ＳＳＨ）の教育課程開発に関与していく必要性が出て来たという状況もあって、この過去の実践を振り返り、今後の糧にもしたいと考えている。

当該実践は、自然科学科一年生「国語総合」の古典分野（教材は「竹取物語――かぐや姫のおひたち」）においておこなった。テーマは、

情報から解釈へ　――物語世界を立ち上げる――

と掲げてみた。古典テクスト（「かぐや姫のおひたち」）にある文字情報を歴史的・語学的に的確に捉え、一定の想像力を働かせて物語世界を立ち上げる（創造する）学習指導を目指したものである。目標と全体計画は次の通り。

二　授業計画

目標

1. テクストに対して自分なりの問題点を持つ。
2. テクストから取り出した情報を解釈に活かす。
3. 解釈と想像によって物語世界を立ち上げる。

全体計画

第1次（1時間）

1. 中学校における竹取物語の学習を振り返る。
2. 自分なりの問題点・疑問点の顕在化とその交流。

第2次（3時間）

1. 講座全体から出た問題点・疑問点の提示。
2. 通釈の過程で問題点・疑問点の解決を目指す。

第3次（1時間）

1. テクスト外部の情報を用いた解釈の提示。

以下に当日の学習指導案（略案）を挙げる。全体計画における第1次、1時間目にあたる。

☆国語総合　学習指導案

1. 日時　二〇一〇年十一月十日（水）二限
2. 対象　京都府立桃山高等学校一年八組（自然科学科）
   男子三一名・女子一一名　計四二名
3. 使用教科書　『改訂版高等学校国語総合』（第一学習社　平成一八年三月検定）
4. 単元　「物語を楽しむ」
5. 教材　「竹取物語――かぐや姫のおひたち」（教科書 pp.218―220）
6. 学習者観

自然科学科の一年生である。自己を表現したい、認められたいという思いを率直に表すことのできる学習者も相当数おり、またそのような思いを秘めつつも静かに遠慮深い態度を保つ者も相半ばする。自己表現を互いに認めあえる素地のある学習集団ではあると見ている。高校生活も一年の半ばを過ぎ、自己の学習活動に対し、一定の評価（学習方法・態度・興味関心や成果など）が可能な時期である。そのうえで、向上心の維持と伸長が彼らと我々に共通の課題である。学力・態度ともにいささか幼さを感じさせることが多く、表現内容にもいまだ深みを感じることはできないが、表現に値する内容を吸収（情報の取り出し）し、表現の方法を得ていこうとする意識（解釈・評価への意識）を萎ませることなく、互いに方法論を模索しつつ、彼らの学力を育てていきたい。

7. 指導観

テクストを解釈・評価（意味の生成）し、その解釈・

評価を的確に表現する能力の育成が学習指導要領二〇〇八年度改訂（「国語」）の中心であると捉えている。そこには、正確な情報の取り出しと批評主体としての自己の確立が前提されるべきである。息の長い取り組みが求められるが、これに取りかかるならば、新一年生の段階では、情報の取り出しを行い、そのことの意味を経験してみることが、第一歩であろう。テクストにある文字情報を歴史的・語学的に的確に捉え、一定の想像力（改訂指導要領総括目標唯一の加筆部分）を働かせて、竹取の物語世界を立ち上げる。ただし、ナイーヴな想像と本文に根拠のある想像は峻別しつつ、解釈を行う。

加えて、学習者自ら問題を設定（疑問・違和感を大切にする読み、ポイント駆動の読み）し、解決する活動を取り入れたいが、対象クラスにおいて可能であるか、やや難しいところである。どの程度取り入れるか、状況を見て判断する。

8. 教材観

本教材の前半は、中学校教科書『国語1』（光村図書）にあり、ほとんどの学習者にとり（一応は）既習の内容であると思われる。それゆえ、テクストにある　歴史的・語学的な情報の取り出しが、自己の読み（解釈）にいかに変化をもたらすかを経験する教材として、願ってもない素材である。たとえば、竹を使った「よろづのこと」の具体化、接続助詞「つつ」や助動詞「めり」の文法的な理解によって、「翁」の領域（テリトリー）意識が立ち現れ、「三寸ばかりなる人」を「子となり給ふべき人」と即断する理由も理解されよう。

自ら問題を設定するという観点から言えば、学習者の疑問については、SF的な内容に関するものも含め収拾をつけがたい状況が予想される。それでも、「わが朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。」は何を知ったのか、「子になりたまふべき人なめり」と判断するのはなぜか、「黄金ある竹を見つくること重なりぬ」となるのはどうしてか、などの疑問は、語学的な情報の取り出しと、それによる解釈によって解決できるものである。

本時は、第一段落（p.218 l1.1―7）を扱う。

9. 本時の目標

①テクストに対して自分なりの問題点を持つ。

②テクストから取り出した情報を解釈に活かす。

③解釈と想像によって物語世界を立ち上げる。

10. 本時の展開

導入　中学校における竹取物語の学習を振り返る。

本時の目標を提起する。

展開　1　自分なりの問題点・疑問点の顕在化とその交流。

2　通釈の過程で問題点・疑問点の解決を目指す。

以下、口語訳と指導／学習活動の要点を示す。

適宜、状況を見ながら取捨選択し、教室における読みの立ち上げに資するものとする。

①今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。

（今となっては昔のこと、竹取の翁という者がいた。）

・主格「が」の補い。

・「翁」とは何歳くらいを言うか。

②野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。

（野山に分け入って竹を取ることを繰り返しては、様々なことに使った。）

・接続助詞「つつ」反復・継続　『体系古典文法』p.91で確認。

・「よろづのこと」の具体化。

③名をば、さかきの造となむいひける。

（名を、さかきの造と言った。）

・係り結びの処理

・「さかきの造」という自称について。

④その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。

（その竹のなかに、根本の光る竹が一筋あった。）

・「その」の指示内容。

・係り結びの処理／助詞の補い

⑤あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。

（不思議がって寄って見ると、筒の中が光っている。）

・形容詞「あやし」

・筒の光っている理由をどう捉えるか。

⑥それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

（それを見ると、三寸ほどの人が、たいへんかわいらしい様で座っていた。）

・形容詞「うつくし」

・動詞「ゐる」

・映像化。具体的にどのような様子か。

⑦翁言ふやう、（翁が言うには、）

⑧「わが朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子になりたまふべき人なめり。」とて、（「私が毎朝毎夕に見る竹の中にいらっしゃることによって、わかった。我が子におなりになるはずの人であるようだ。」と言って、）

・敬語動詞「おはす」

・翁が敬語（「おはす」「たまふ」）を用いた理由をどう捉えるか。

・格助詞「にて」原因・理由　『文法』p.85で確認。

・「知りぬ」の内容は何か。それがなぜ理由になるのか。

・助動詞「べし」当然

・「なめり」「なるめり」（～デアルヨウダ）

・助動詞「めり」推定（視覚的な）根拠のある推量『文法』p.67で確認。

⑨手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。（ちょいと手のうちに入れて、家に持って来た。）

・接頭語「うち―」

⑩妻の嫗に預けて養はす。（妻の媼に預けて養わせる。）

・助動詞「す」使役

⑪うつくしきこと限りなし。（かわいいこと、このうえない。）

⑫いとをさなければ、籠に入れて養ふ。（たいへん幼いので、籠に入れて養う。）

11. まとめ

本時の目標にしたがい、下記の「評価」点を確認する。

12. 評価

①「テクストに対して自分なりの問題点を持つ」ことができたか。

②「テクストから取り出した情報を解釈に活かす」ことが経験できたか。

③「解釈と想像によって物語世界を立ち上げる」経験ができたか。

三　研究授業の実際

実際の授業では、まず展開1「自分なりの問題点・疑問点

の顕在化とその交流」として、A4サイズのシートに、本文を読んで自分なりの問題点・疑問点（共感や違和感・疑問を感じたところ）を記させ、一列（七名）を指名により、発表させた。このとき、

・中学の教科書では「さぬきの造」だったが？
・翁は筒の中を見るため竹を切ったのか、切らなかったのか。どうやって切ったのか、切れていたのか。
・なぜ出会ったばかりなのに自分の子になるべきと言っているのか。

などの疑問点が挙げられた。これらは、各自のシートにも多くの生徒が疑問として挙げていたもので、教室では共感を以て受け入れられていた。これらについては授業の中で順次取り上げることを確認し、展開2に移った。

展開2「通釈の過程で問題点・疑問点の解決を目指す」では、「まじる」（「入る」ではないこと）の表現効果、接続助詞「つつ」の意味、「よろずのこと」の具体化などを中心に考えさせた。冒頭の第二文においてこれら三点を押さえておくことは、「なぜ出会ったばかりなのに自分の子になるべきと言っているのか」という問題を解決するための情報を有効に整理することでもある。

当日の授業では、ここまでの内容を押さえて終わった。事後の研究会では、授業進度が遅いことを指摘された方もあったが、単元の学習目標を達成するためには十分時間を置くべき内容であったと考えている。

四　研究授業後の展開

生徒が提出したシートをプリント（B4一枚）にまとめ（プリントAとする）、配布した。内容は以下の通り。（疑問点等の後ろの数字は同一内容を挙げた人数。）

（A）『竹取物語』冒頭部分　一年八組諸賢　読者としての反応

①今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。
・「翁」はどんな意味。「媼」と対応している？

②野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。
・よろずのこととは何か。

③名をば、さかきの造となむいひける。
・「名をば」の「ば」の意味。
・中学の教科書では「さぬきの造」だったが？

④その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。
・「なむ」の意味。
・「もと」とはどこの部分。
・なぜ竹が光っているの。3
⑤あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。
・竹の外から見てわかったのか、竹の中を見てわかったのか。光っているのになんで見つけられたか。3
・翁は筒の中を見るため竹を切ったのか、切らなかったのか。どうやって切ったのか、切れていたのか。8
・よく姫切らずに竹だけ切ったね。
・なぜうまく切れたの。（切ったなんて書いてない）2
・竹を切ったという表記がない。どうやって見ることができたのか。
⑥それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。
・どのように竹の中で育ち、どのようにあらわれたのか。どうやって死なずに出てきた。4
・なぜ竹の中に人がいるの。
・服を着ていたのか。今後の服はどうするか。
・9センチの人間なんてありえない。変に思わないのか。恐れないのか。4
⑦翁言ふやう、
⑧「わが朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子になりたまふべき人なめり。」とて、
・「　」の中の意味（訳）がわからない。3
・初めて見つけた光る竹を朝や夕にも見ていたと言った意味がわからない。
・かぐや姫は昔から竹の中にいて、もっとちいさかったのかなぁ。
・「なりたまふべき人」の「べき」の意味。
・「おはするにて」「なりたまふべき人」なぜ子どもに対して敬語を使っているのか。（その姿が神々しかったため？）
・「なめり」って何？　なぜ「なんめり」とか「なるめり」とか書かずに「なめり」なのか。
・なぜ出会ったばかりなのに自分の子になるべきと言っているのか。7（運命的なものを感じたのか）
⑨手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。
・「こぬ」と「きぬ」の違い。
・持って帰った理由。そんな怪しいものを持って帰るの

か。4

・かぐや姫の心情は？（逃げないの？）

⑩妻の嫗に預けて養はす。

・翁が勝手に連れてきたどこの子ともわからない子を養うことになぜ嫗はすぐに了承したのか。（だれでもいいから子がほしかったから？）

・預けっきりなのか。

⑪うつくしきこと限りなし。

・なぜ二度も「うつくし」と言うのか。

⑫いとをさなければ、籠に入れて養ふ。

・「をさなければ」は「幼い・若い」という意味か、「小さい」という意味か。2

・なぜ籠に入れて育てるのか。3（「子」と「籠」をかけた洒落？）

⑬竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに、節を隔ててよごとに黄金ある竹を見つくること重なりぬ。

・なぜ二度も「竹を取るに」と言うのか。2

・どんなふうに黄金があるのか。

・なぜかぐや姫を手に入れた後、黄金が出るようになったのか。3

・「よごとの黄金」どうやって見つけたのか。

・他人にとられなかったのか。竹取は一人だけなのか。

⑭かくて、翁やうやう豊かになりゆく。

・どうやって黄金の竹で豊かになれたの。2

このプリント（A）に挙げられた内容は、授業の中で丁寧に扱い、解説し、解釈を立ち上げ共有していった。また、最後にそれらをまとめたプリント（B）を用意し配布した。（全体計画の第3次にあたる。）授業の経験をいくらかでも印象に残してもらおうという意図である。次にそのプリント（B）を示す。

（B）『竹取物語』冒頭部分　一年八組諸賢　物語世界を立ち上げる―情報から解釈へ―

☆八組生徒諸君の抱いた疑問や違和感に立ち止まり、「竹取」テクストに示された情報を中心にテクストの解釈に努めてみると、次のように『竹取』の物語世界が立ち上がってくる経験（二次的創造）ができました。

A　物語の舞台を地理的に想定する。
疑問・違和感
a1　中学の教科書では「さぬきの造」だったが？　14
a2　なぜ竹が光っているの。3
情報
a1「さぬき」は四国の讃岐、大和の讃岐（散吉＝生駒南部）などの可能性。
　「三室戸斎部の秋田」の「三室（戸）」は山城（宇治）、大和（生駒北部）にある。
a2　完全にテクストの外側にある情報であるが、大和（生駒中部）に「光る竹」の古伝説（春日大社に伝わる縁起）がある。また、竹などに付着し発光する微少なキノコ（「スズメタケ」など）が存在し、古い伝説のおおもとになっているか。
解釈
「さぬき」「さかき」は写本の違いに過ぎない。高校教科書（岩波新体系）の底本は、一六世紀末のかなり新しいモノ。仮に「さぬき」を取ると、その方がおもしろいかも。すなわち、a1・a2の情報は、大和・生駒地方に収束する。竹取物語の舞台は大和の生駒山系。地域の成り上がり者となった「さぬき」在住の「造（麻呂）」は、古代より祭祀を司る斎部氏の権威を借りて、姫に箔のある名前をつけた。

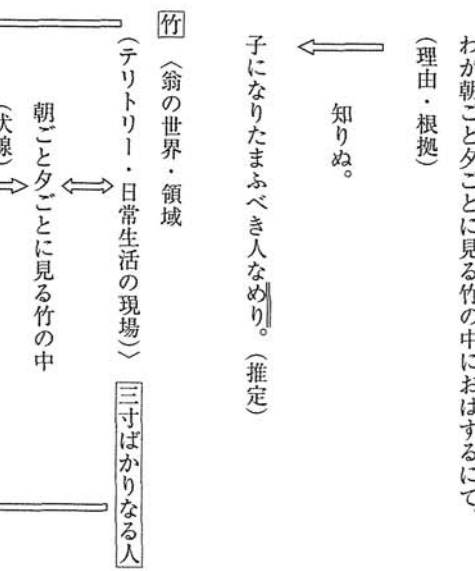
B　翁の心理的世界を推測する。
疑問・違和感
b1　なぜ出会ったばかりなのに自分の子になるべきと言っているのか。7
b2　持って帰った理由。そんな怪しいものを持って帰るのか。4
b3　なぜ籠に入れて育てるのか。3
b4「なめり」って何？
情報
「子」と「籠」を掛けた洒落には違いないが、それだけでは説得力に欠ける。そこで、助詞・助動詞に注目して、語学的・構造的に考えてみる。
　「わが朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子になりたまふべき人なめり。」とある。「めり」は推定の助動詞。推定とは根拠のある推量。「めり」は視覚的根拠に基づく主観的な判断（推定）を示す。「にて」はこ

こでは理由を示す格助詞。つまり、「子になりたまふべき人なめり」という推定の根拠は、この子が「わが朝ごと夕ごとに見る竹の中におはする」という眼前の事実である。

「わが朝ごと夕ごとに見る竹の中」を具体化した表現として「野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。」とある。「まじる」は類似の表現（例えば「分け入る」）に比べ、内包的・親和的である（「分け入る」だと外部的・対立的）。「竹を取りつつ」の接続助詞「つつ」は、上にある動作の反復・継続を示す。また、「よろづのこと」を具体化すれば、「籠」を筆頭に、「笊・箱・櫛・簪」などの竹の加工となるだろう。いずれも、翁と竹との日常的なつながりを示唆していると読めなくもない。

解釈

竹の茂る野山は、翁の日常生活の場であり、翁の意識においては、竹林は自分のテリトリーと捉えているのではないか。その自分の世界にあらわれた以上、この子は自分の子になるべき存在と意識されるのであろう。例えば、ここに生えた「竹」が我が手によって「籠」となるように。



C　翁のかぐや姫に対する畏怖を読み取る。

疑問点・違和感

c1　なぜ子どもに対して敬語を使っているのか。

情報

翁の台詞に「おはするにて」「なりたまふべき人」とある。いずれも尊敬語、翁から姫に対する敬意を示す待遇表現である。その理由を、質問者は「その姿が神々しかったため」と自答し、教科書のワークには「神仏からの授かりものと思ったから」とあった。

後段に「帳の内よりも出ださず、いつき養ふ。」とある。「いつく」は「神仏に奉仕する」という原義より、「大切に世話する」の意に用いられる。（類語に「かしづく」がある。）

解釈

後段の「いつく」の使用も鑑みて、質問者やワークの読みで宜しいかと思う。なお、翁は「竹取の翁といふ者ありけり」、姫は「三寸ばかりなる人」と紹介されている。語り手は、姫を翁の上位に置いて語っている。

D　姫の成長と翁の経済成長のシンクロを認める。

疑問点・違和感

d1　なぜかぐや姫を手に入れた後、黄金が出るようになったのか。3

情報

「黄金ある竹を見つくること重なりぬ。」の後は、「かくて、翁やうやう豊かになりゆく。この児、養ふほどに、すくすくと大きになりまさる。」と続いていく。「やうやう」は「次第に」の意、「―なりまさる」は「次第に―になっていく」の意である。

また、後段に「竹を取ること久しくなりぬ。勢ひ猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば、」とある。二重傍線部「ぬ」「に」「ぬれ」はいずれも「完了」の助動詞「ぬ」である。

解釈

素朴な解釈として、この黄金は「天人から翁に支給されたかぐや姫の養育費」と考えることができる。このとき、以下のように、姫の成長と翁の経済成長の様子が同調していることは、その読みを支える根拠となりうるかも知れない。翁の経済成長を支えているのは、竹の中の黄金であり、その黄金により翁が裕福になっていくペースと姫が成長していくペースがともに「次第に」で表わされ、翁の経済成長が「完了」するとともに、姫の成長も「完了」したわけである。

◇成長期

黄金ある竹

⇦　かくて、

翁……やうやう豊かになりゆく。

この児、……養ふほどに、すくすくと大きになりまさる。

◇完了（完成）期

竹を取ること久しくなりぬ。

⇦

翁……勢ひ猛の者になりにけり。

姫……この子いと大きになりぬれば、

五　成果と課題

・「テクストに対して自分なりの問題点を持つ」ことができたか。

・「テクストから取り出した情報を解釈に活かす」ことが経験できたか。

・「解釈と想像によって物語世界を立ち上げる」経験ができたか。

事後のアンケートを取ることは怠ったが、以上の三点については、授業中の反応からまずまず満足のいく状態であったと思う。違和感や疑問点を持ちやすいテクストに対し、学習空間で共有した課題を、高等学校レベルでの読みの手法（構造的な視点）や知識（文法事項）を用いて解決し、読みの世界が立ち上がる経験ができたものと感じている。ただしこの授業において、問題解決の主体は学習者自身ではない。その点、彼らには物足りなさもあったろう。もし時間的な条件が許せば、今後は共同学習等によって自ら解決の手法を学び、解釈を創造していくような学習指導がしてみたいと感じさせられた。

六　今後の展望

内輪の事情を申し述べて恐縮だが、桃山高校では次期ＳＳＨの取り組みの一つとして、国語科も主体的に関与する学校設定科目（名称…ＧＳロジック）が予定されている。事ここに至り改めて本校ＳＳＨの研究開発課題を見れば、それは、

・探究心・独創性にあふれた人材の育成
・創造性にあふれ、自ら道を切り開いていける人材の育成
・絶えず「問を見いだし」、「新たな知の創造」ができる人材の育成

を目標とするカリキュラム開発である。

したがって、この教育課程で育成されるべき能力として、

・主体性
・問いを立てる能力
・問題を解決する手段を探る能力
・問題解決の結果または過程で生まれたものを取り出す能力

などを挙げることができると考える。

また、周知のように、二〇〇八年度改訂（現行）高等学校学習指導要領では、「国語科の目標」として従来「思考力を伸ばし」とあったところに「想像力」が加わり、「思考力や想像力を伸ばし」と変更されている。この部分について、『学習指導要領解説』では、

・「思考力」とは、言語を手掛かりとしながら物事を筋道立てて考える能力
・思考力を伸ばすとは、…更に進んで、問題を解決しようとする創造的かつ論理的な思考力を身に付けること
・「想像力」とは、物事を心に思い浮かべたり、推し量ったり、予測したりする能力
・想像力を伸ばすとは、…更に進んで、様々な資料を基に、これから起こるであろうことやどのように行動すればよいのかということを思い描くなど、将来の状況やあるべき姿を予測したり、見通しをもって行動したりすることの能力までを含めて身に付けること
・高等学校段階における想像力には、物事の微妙なところまで感じ取る心情的な側面のみならず、根拠に基づき先を見通すなど、論理的な側面もある…

などと説明されており、「思考力」「想像力」には、課題を設定し解決する能力や論理によって新たな創造を生み出す能力という側面を見ることができるだろう。（改訂の背景に「PISA型」読解力（Reading Literacy）という学力観を受容する姿勢があることは論を俟たない。）

これらから、冒頭申し述べたような「テクストに対して主体的に向き合い、そのテクストに新たな意味を見出す」ことに楽しみを覚える将来の良き「読者」を育てるというナイーヴな願望は、国語科教育の求めるものとして聊かも傍流では

ないと考える。

今後、勤務校において機会を得、こうした目標を少しでも達成すべく努めたい。

書かれたテキスト（文学・評論・古典作品・図・グラフ等を含む）に対し、自らの論理（ロジック）を以て、主体的・自律的に批評・評価して、他者に対して一定の説得力を持つ新たな解釈を創造し続ける学習者を育てる。

（京都府立桃山高等学校教諭）

参考文献

京都府立桃山高等学校（２０１４）『平成22年度指定　スーパーサイエンスハイスクール　研究開発実施報告書　第４年次』

国立教育政策研究所（２００２）『生きるための知識と技能―ＯＥＣＤ生徒の学習到達度調査（ＰＩＳＡ）２０００年調査国際結果報告書』（ぎょうせい）

保立道久（２０１０）『かぐや姫と王権神話』（洋泉社）

文部科学省（２０１０）『高等学校学習指導要領解説　国語編』（教育出版）

教材　かぐや姫のおひたち

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さかきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。翁言ふやう、「わが朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子になりたまふべき人なめり。」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の嫗に預けて養はす。うつくしきこと限りなし。いとをさなければ、籠に入れて養ふ。

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに、節を隔ててよごとに黄金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて、翁やうやう豊かになりゆく。

この児、養ふほどに、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。帳の内よりも出ださず、いつき養ふ。この児のかたち、けうらなること世になく、屋の内は暗き所なく光満ちたり。翁心地あしく、苦しきときも、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。

翁、竹を取ること久しくなりぬ。勢ひ猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば、名を、三室戸斎部の秋田を呼びてつけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。このほど三日うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらはず呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。世界のをのこ、貴なるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、音に聞き、めでて惑ふ。